吉田勝彦　その銅版画の制作について

杉山　はるか

はじめに

当館は、吉田勝彦（1947－　）の作品を平成29年度現在のところ48点収蔵している。これらの作品は平成元年度に38点、さらに平成18年度に追加で10点、本県出身で古鐘や拓本のコレクターであり、研究者でもあった真鍋孝志氏より寄贈されたものである。中でも《小さな永遠》(no.17)[1]は『愛媛県美術館所蔵作品集』(2010年）に掲載されるなど収蔵作品の中でも代表作として紹介され、またその他の作品も展示の中でこれまで繰り返し紹介されてきている。当館ではこれまで3回吉田の特集展示でこれらの作品をある程度まとまって紹介する機会を設けてきたが、その作品に触れ、いつの間にか無心にその世界に入り込んでしまう人の数は多いだろう。エングレーヴィングやメゾチントの驚くほどに繊細な線によって繰り広げられる静謐な世界。日中と夜との狭間の光の微妙なニュアンスをもモノクロームや時にはカラーメゾチントの手法で巧みに表現し、海辺や森などの風景が独特な世界観をもって切り取られる。

昨年の春2017年3月29日（水）に筆者は初めて茨城県に住む吉田の自宅とアトリエを訪問し、これまでの作品制作について、また近作や今後の制作について、直接話を伺う機会を得た。今回は吉田勝彦の作品を、年代を追って振り返り、訪問の際に見聞きしたことを参考にしながらこの作家の作品を改めて図版とともに紹介したい。最後に吉田の年表を要約して本稿のまとめとしたい。

当館所蔵の吉田勝彦作品について

まず簡単に、当館が所蔵している作品について触れておきたい。当館の所蔵作品は前述のように真鍋孝志氏から寄贈を受けた48点である。後ろに添付する図版リストの内、初期の作品11点以外の〇印のある作品が全て含まれる。[2] これらの中で版画集として発表された作品としては、1980年に発行された『La Habitación de mi corazón（我心の部屋)』(77ギャラリー）全8点の中のから《セゴビアの秋》、《カンポ・デ・クリプタナの家並み》、1981年の『Meditación Secada（乾いた黙想)』(椿近代画廊）全3点、1988年の版画集『森』から全8点、そして1991年に発表された銅版画集『隅田川河岸』から全10点を収蔵している。その他1980年代に制作されたエングレーヴィング、メゾチント、カラーメゾチント、そしてエッチングによる日常風景や静物をテーマにした作品が多くを占めている。

吉田勝彦の作品制作について

吉田が銅版画を本格的に志したのは、多摩美術大学卒業後に入学した東京藝術大学大学院で、駒井哲郎のもとで学んだことが契機となっている。吉田は当時を振り返り、駒井との関係を「良い師であり、兄貴分であり良い関係を築いていた」と思い返す。銅板に直接ビュランで彫るエングレーヴィング、そして同様に銅板に直接ベルソーで傷をつけて闇を表現するメゾチントの技法を主な手段としてその後精力的に制作を続けてゆくことになった。吉田は1974年、春陽会に初出品し連作《四獣視姦思考》(nos.1,2）が新人賞を受賞したことでまず注目を集める。この作品は、当時取り組んでいた人間の理性の水面下に渦巻く欲望や無意識、そしてそれらが現実の体験と結びついて生まれる夢を動きのある物語として表現した全12点からなる連作である。[3] このテーマは自身の中でさらに消化され、次なる展開へと向かうのであるが、そのためにはまず自分自身の内面を見つめる時間が必要であった。吉田は藝大時代に出会ったベネズエラから留学していた夫妻を頼りに、1974年ヨーロッパを経由して同地へと向かった。ヨーロッパではスペインのマドリッドを拠点

とし、本人曰く貧乏旅行ながら鉄道の一等車の旅券だけは手に入れて、スペイン各地やフランス、ドイツ、イタリア、スイス、ベルギー、オーストリアと各国を旅した。ここでは各地の美術館や教会で無数の芸術作品に触れながら約4か月を過ごすことになった。そして南米のベネズエラへ。首都カラカスから車で4時間ほど東のカリブ海に面した海辺の街・バルセロナ市での暮らしが始まる。現地のアルマンド・レベロン美術学校にて特別版画教授として銅版画を教えながら、ゆったりした時の流れの中で充実した日々を過ごした。

最初に住んだのは独り者の老婆ドーニャ・マリアが住む家の庭にある物置小屋を改造した部屋で、庭には南国のフルーツの木や植物が繁茂していた。ここでの体験について、吉田は当時の日記で印象的な言葉を綴っている。夜通し机に向かって銅板の上で作業する様をカリブ海の上を進む船に例えながら、「特定のある時刻、私は仕事を終えて床に就く前のあるひととき、時の渦のまっただ中で自分の全存在がこのように浮遊するのを楽しみながら感じる時がある。夜と朝の間の静かな小宇宙。」[4]当時の経験をもとに発表した画集のタイトルである「La Habitación de mi corazón」つまり「我心の部屋」、そしてこの言葉の中にある夜と朝の狭間である特別な時間の不思議な浮遊する感覚について思いを馳せると、ここで吉田が取り組む新たな作品への理解に近づくことができるだろう。

《地下廻廊の朝（グレゴリオ聖歌によせて）》(no.4)は、26,8×48,8cmの大作で、背後に堅牢な廻廊の建築物が奥行をもって描かれ、その全体を激しい勢いのある光のような線が縦横無尽に貫いて、さらに不思議な有機物が絡み合うように存在している。有限の時と生命の渦巻きをビュランの力強い線で表した作品である。こうした作品は、帰国後に満を持して制作した大作《墓守人サルバドールの夢（アンブロシオ聖歌によせて）》(no.7）に結びつく。この作品はより壮大な建築物が上下左右に広く展開し、ダイナミックに光を思わせる直線や有機物が表されている。この作品は第55回春陽会展賞を受賞し、画壇における吉田の評価を一躍高めることとなった。

吉田自身、ベネズエラでの体験がいかに有意義なものであったか語っている。「彼等がよく口にするTiempo（時）のある静かな土地での生活は僕の思考や制作上のある区切り目として多大な回答を与えてくれた事も又確かなことであった。」[5]

また、ヨーロッパやベネズエラで目にし、体験した街並みや大自然もまた大きな影響を及ぼしている。ベネズエラでの体験について吉田が語ったことによると、「内陸の国境の方へ『サルト・アンヘル』[6]を目指して車を走らせ、生徒たちと1週間くらい旅をしたときにみた風景は印象的であった。真っ直ぐな道が続き、左右には山があって周りは砂漠が広がっている。遠くの山の方に白いものが見えたと思うとそれは雨で、近くを通り過ぎるときにその雨の下を通り抜ける。あちこちにそうした雨が降っているのがみえる。とても広い大地を感じた。」(筆者要約)

こうした体験は、帰国後に制作された《砂のサバンナ》(no.5）や、《白夏夜嵐天の雨簾》(no.6)といった作品に直接結実していると言えるだろう。

『La Habitación de mi corazón（我心の部屋）』そして、『Meditación Secada（乾いた黙想)』はそれぞれヨーロッパとベネズエラでの光景から着想した作品で綴られた、エングレーヴィングとメゾチントによる画集である。セゴビア、マドリッド、アンダルシア州、クマナ、カンポ・デ・クリプタナ、《乾いた街》(no.14)はベネズエラのボリバル州、州都シウダード・ボリバルと主題として様々な都市や地方が名を連ねる。《春雷》(no.16）には「サルト・アンヘル」と思しき壮大な滝が右手に勢いよく流れ、劇的な雷が空を彩っている。《Carmen4-S-.Madrid》(no.9）のようにエングレーヴィングで強い日差しに照らされた明るい街角を表した作品や、《午後の一隅》(no.10）のように、窓の外の明るい街並みをエングレーヴィングで、対照的に部屋の内部をメゾチントでそれぞれの技法の特長を生かして表現した作品、そして《遥かなるアンダルシア》(no.11）のように、下からの太陽の光に照らされた幻想的な雲が広がる空や、白い壁の家が点在する丘が広がる壮大な光景を、メゾチントの特性を最大限に生かして表した作品など、銅板の技法を使い分けて対象を見事に表現している。この二つの画集は、吉田の長く充実した旅の成果と卓越した技術力が詰まった画集と言えるだろう。

《小さな永遠》(no.17）は1981年、この時期に制作された作品であるが、そのイメージは1974年に発表された《内室》(no.3）に遡る。メゾチントで彫られた闇の中、正面に階段が描かれる。その階段は左手に折れ曲がって上がる構造になっており、こちらからは見えないその階段の上方から光が差し込んでいる。その構図は至って単純でありながら、見る者の想像力を掻き立てられる魅惑的な作品となっている。《内室》

は前述した《四獣視姦思考》とのつながりの中で生まれた作品で、同作の内の「その2　予兆」(no.2)は同様にメゾチントで表現された作品で、暗い闇の空間の正面にある扉がわずかに開き、扉の向こう側から光が差し込んでいる。これから始まろうとする魑魅魍魎とした得体のしれない無意識下の蠢きを予感させる。また《内室》は先述の画集のタイトル「心の部屋」のイメージとの関連も考えられる。

吉田は1978年に結婚して千葉県船橋市へ、さらに1980年に茨城県稲敷郡牛久町に移り、1982年には《早春》（no.19）や《小野川の春》（no.20）のような身近な風景を題材に制作した。

吉田の作品モチーフがこのように大きく変化したことについて、美術評論家で読売新聞社記者の村瀬雅夫は、「たんたんとした現代の平凡な風景版画と見える作品群は実に恐るべき試みの始まりで、現代版画に変化をもたらすものであるのかもしれない。」[7]と当時の日本における版画の潮流の中で新鮮な傾向であることを指摘し、吉田と同じく春陽会の会員であった版画家・北岡文雄は、「彼は身近の風景をクールな目で克明に描き始めた。冷たい目だが不思議に生活を感じる風景である。それは単なる自然描写では無くまた生活感情を感じさせながらそれに感傷もなく沈溺もしていない。（中略）彼の田園風景は単純な写実を超えた心象風景である。」[8]とその風景の中に横たわる徹底した写実に見られる客観性とまた同様ににじみ出る主観性について指摘する。吉田が主題を目の前の自然に移行したことについては、南米で目にした自然の姿ももちろんであるが、田舎に居を移したことで身近に魅力ある光景が広がったことも大きいだろう。異国での緩やかな時間の中で自らの内面との逡巡を経て、澄み切った潔い視点で見つめた周囲の自然。吉田にとり、新鮮で魅力的な主題となったに違いない。

そして、《陽溜りの小径》（no.22）のように森林をテーマにした作品もこの時期に登場しており、後の『森』シリーズへの布石となっている。加えて、《コップに挿したシクラメン》（no.23）のように、花卉を主題にした作品もこの時期から制作が始まる。これらは正に目前の机上に広がる「小宇宙」であり、熟達したビュランの細かい線が密に集まって植物の花弁や雌蕊、雄蕊まで巧みに表現している。可憐な野の花やマーガレットなど、単なる身近な花が吉田の手にかかるとまるで魔法にかかったかのように美しく変化する。

カラーメゾチントによる作品がまとまって制作されるのは1980年代半ばになってからである。《レェチェリア海岸の夜明け》（no.39）、《プエルト・ラ・クルスの夕焼け》（no.40）はそうした一連の作品の中に含まれるが、ベネズエラからの帰国直後にもモノクロームのメゾチントで同じ場所を題材にした作品を制作している。横長の構図で広大な水平線を表し、朝と夜との狭間の海と太陽と空が演出する美しい一瞬の光景を見事に表現しており、カラーメゾチントの真骨頂とも言うべき秀作である。

1988年に発表された画集『森』は、8点中6点が長辺の幅が約60㎝という吉田の作品の中では最も大判のエッチングによる作品シリーズとなっている。エッチングはそれまでも森をテーマにした作品によく採用されており、木々の細やかな葉のさざめきや細い枝を表現するのに適しているのだろう。この連作では森の明るい入り口から暗い深淵、また視点も木々の懐から高台から見下ろすようなものまで多様な森の姿をとどめている。

1991年の『隅田川河岸』は、『森』とは対照的に隅田川周辺に展開する都市風景を題材にしたエングレーヴィングとメゾチントによる作品群であり、橋や船着き場、ビルなどの人工物が多様な視点で表現されている。都市の建築物はビュランによる力強い線で表現され、夜景を表した《月と星と》（no.51）、夕方の空と雲を表した《浜離宮夕照》（no.54）の2点のみメゾチントで制作されている。

吉田はその後1993年により自然豊かな茨城県八郷町（現・石岡市）へと移り、現在もその山桜が美しいという山間の地に暮らしている。この地では各地から集まった作家たちが共にギャラリーで作品を発表している。ここで山桜を始めとする身近な自然の風景や花や果物などの静物を題材にした銅版画、さらには油彩も制作。それらの中にはカラーメゾチントによる作品も多くを占めている。

吉田勝彦は、銅版という技法を用いて、小さくも無限に広がる独特の世界観を表現してきた。かつて異国の地で悠久の時間と豊かな大自然の中で向き合った自己、繰り返す内省の経験。目の前のいかなるものでも、その形状そのものの中に宿る生命のような何かを引き出し、作品として昇華してみせた。吉田のこれらの仕事が、その安定した秀でた技術力に支えられていることは言うまでもない。その作品に対峙するとき、私たちは改めて日常に広がるこの素晴らしい世界に気づかされ、また訪れたことがあるにせよ、ないにせよ、異

国の地に憧憬の思いを馳せることができるのである。今後の展望については、「モノクロに絞り、かつて主題として取り組んだ「夢」や「時」をテーマにした作品シリーズを再び制作したい」と吉田は語った。また次なる展開を楽しみに待ちたい。

吉田勝彦年譜

1947年　東京都練馬区に生まれる。
1965年　多摩美術大学、絵画部油絵科入学
1968年　多摩美術大学にて末松正樹のもとでリトグラフの実習を受ける。また駒井哲郎のもとで銅版画の実習を受ける。
1969年　多摩美術大学卒業。初個展（ルナミ画廊、東京）、多摩美術大学版画研究グループ展「UPプリンター16展」（みゆき画廊、東京）。
1970年　木版画を始める。個展（美術出版社ロビー）
1971年　東京藝術大学大学院版画専攻科入学。駒井哲郎のもとで銅版画を本格的に始める。
1972年　東京藝術大学大学院修了。大橋賞受賞。
1973年　東京藝大に研究生として1年在籍。同大学研究室グループ展「アトリエC－126展」（みゆき画廊、東京）
1974年　「今日の作家達展」（東京セントラル美術館）第51回春陽会展に初出品し、《四獣視姦思考》で新人賞受賞。渡欧し、約4か月スペインを拠点に各地を巡り、その後ベネズエラのバルセロナ市に滞在する。
1975年　ベネズエラ、バルセロナ市のアルマンド・レベロン美術学校にて特別版画教授として銅版画を教える。「全国ベネズエラ素描版画展」（カラカス）出品、ジャーナリスト賞受賞。「Grafica7展」（メンドーサギャラリー、カラカス）出品。年末に帰国。
1976年　第53回春陽会展に出品し、《地下廻廊の朝》で研究賞受賞。東京版画研究所の講師となる。
1977年　月刊誌『言語生活』（筑摩書房）の目次・本文のカットを担当。
1978年　第55回春陽会展に出品し、《墓守人サルバドール》で第55回春陽会展賞受賞。準会員に推挙される。東京版画研究所の講師を辞す。個展（平安画廊、京都）、「吉田勝彦・渡辺達正二人展」（椿近代画廊、東京）。今井道子（現・絵本作家）と結婚し千葉県船橋市に転居。
1979年　個展（77ギャラリー、東京）、（しずおか画廊、静岡）、（福岡画廊、福岡）、（トアロード画廊、神戸）、（メイト画廊、芦屋）。第56回春陽会展に出品。
1980年　第57回春陽会展に出品し会員に推挙される。個展（由美画廊、浜松）、（77ギャラリー、東京）、翠峰画廊、徳島）、（NDA画廊、札幌）、（りべらるアート、広島）、（椿近代画廊、東京）、（ギャラリーフジイ、徳山）開催。画集『La Habitación de mi corazón』を77ギャラリーより刊行。茨城県稲敷郡牛久町に転居。
1981年　画集『Meditación Secada』を椿近代画廊より刊行。同画廊にて個展開催。女子美術大学にて版画特別集中講義を担当。小川国夫『石の夢』（桜華書林）の限定本用銅版画三葉制作。「今日のシュールレアリスム展」（東京セントラル美術館）、「いまひとつの世界『幻想の絵画展』」（横浜市民ギャラリー）、第一回西武美術館版画大賞展に出品。
1982年　春頃よりエッチングによる作品を制作。第59回春陽会展に出品。第27回CWAJ現代版画展に出品。『中央公論』8月号より12月号まで本文カットを担当。
1983年　「現代版画10人展」（フジヰ画廊、東京）、第60回春陽会展出品。個展（77ギャラリー、東京）、（しずおか画廊、静岡）、）フラワーコレクション画廊、大阪）、蒔画廊、名古屋）、（由美画廊、浜松）、（パルコギャラリー、千葉）、（翠峰画廊、徳島）、（メイト画廊、芦屋）。斎藤カオル・吉田勝彦二人展」（西武池袋百貨店）、「現代日本の美術・2－風景との出会い－」（宮城県美術館）。『吉田勝彦版画集』（形象社）出版。同時にオリジナル銅版画三葉を含む特装限定版120部も刊行された。版画集刊行記念展（形象ギャラリー、東京）
1984年　版画集刊行記念展（ギャラリー池田美術、77ギャラりー）、個展（ギャラリーNO、シドニー）、「現代茨城の美術展」（茨城県立美術博物館）
1985年　春陽会を脱会する。
1986年　絵本、かがくのとも『えぞまつ』（福音館書店）を出版し、記念展開催（檜画廊、東京）。新作展（ギャラリー池田美術、東京）
1987年　個展（蒔画廊、名古屋）、（工芸、埼玉）、（ギャラリープチフォルム、大阪）
1988年　ギャラリー池田美術より版画集『森』を発行し、記念展開催。
1989年　個展（すいらん、前橋）冬にルーマニア旅行
1990年　愛媛県美術館に作品38点が収蔵される。（「新館蔵品展」にて紹介）

1991年　個展（松屋、東京）ギャラリー池田美術より版画集『隅田川河畔』が刊行され、記念展が開催される。

1993年　個展（大手町画廊、東京）茨城県八郷町（現・石岡市）へ転居し、現在も在住。

1994年　個展（ギャラリー池田美術、東京）、（ギャラリー玲風、東京）（すいらん、前橋）

1995年　「Gトリプル」（日動画廊、福岡）、「版画日動展」（日動画廊、東京）

1996年　小回顧展（伊勢甚、水戸）「新収蔵品展を中心に」（茨城県近代美術館）

1998年　「八郷の作家たち展」（八郷公民館）、「吉田勝彦・吉田道子二人展」（東京労音　ギター文化館）

1999年　個展（伊勢甚、日立）、（藤野屋画廊、栃木）

2000年　個展（伊勢甚、水戸）多摩美術大学講師。

2001年　個展（由美画廊、浜松）

2002年　「静寂の息づかい　―吉田勝彦の版画」（愛媛県美術館分館）

2003年　「田園と都市　常総の美術家たち展 - 茨城県近代美術館所蔵品から-」（茨城県つくば美術館）、「寺田コレクション『建築の見える風景』」（東京オペラシティアートギャラリー）

2005年　「小さな永遠～吉田勝彦の版画」（愛媛県美術館分館）、所蔵品展「日本のこころ」（茨城県近代美術館）

2006年　「収蔵品による近代日本洋画の名作展－高橋由一から岸田劉生まで－」（神奈川県立近代美術館鎌倉）

2007年　愛媛県美術館に画集『隅田川河岸』10点が収蔵される。（「新館蔵品展」にて紹介）

2010年　制作実演「カラーメゾチントの実演とお話」（ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション）

2014年　「特集展示　吉田勝彦―小さな永遠」（愛媛県美術館）

---

[1] 作品画像はまとめて年代順に当館収蔵作品48点と、収蔵していない作品の中から11点計59点別途掲載する。

[2] 吉田氏からこれらの作品も今後寄贈していただくご意向を示していただいている。

[3]「その1」から「その12」まで12点あり一つの額に入れて展示されたが、その内「その11」は白紙のまま署名だけ入れて一緒に展示された。長谷川公之「現代版画イメージの追跡」、『美術手帖』1986年9月増刊、pp.404-405

[4]「1975年9月（レエチェリア日記より）」、『La Habitación de mi corazón』（77ギャラリー、1980年）

[5]『La Habitación de mi corazón』序文より（77ギャラリー、1980年）

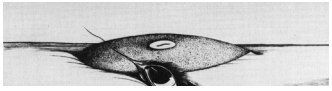
[6] エンジェルフォールのスペイン語名。世界一落差の大きなことで知られている滝。

[7] 村瀬雅夫「誰も試みなかった銅版画の秘法」、『吉田勝彦銅版画集』形象社、1983年、p.6

[8] 北岡文雄「白く光る心象」、『吉田勝彦銅版画集』形象社、1983年、p.5

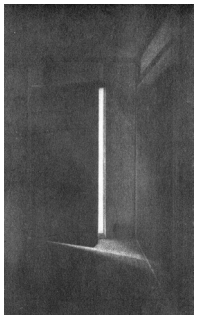
吉田勝彦　作品画像

1



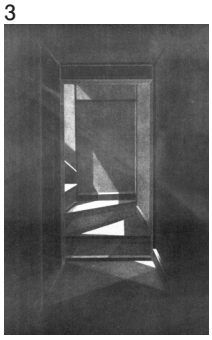
「その１　始まり」《四獣視姦思考》より
1974 年　4.2×15.2cm
エングレーヴィング／紙

2



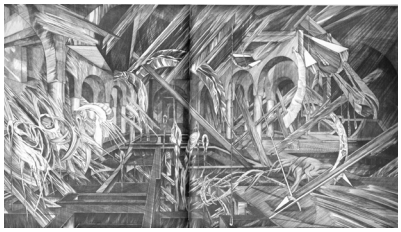
「その２　予兆」
《四獣視姦思考》より
1974 年　14.0×8.3cm
メゾチント／紙

3



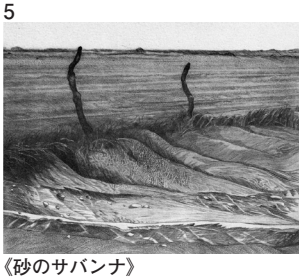
《内室》
1974 年　30.3×19.0cm
メゾチント／紙

4



《地下廻廊の朝（グレゴリオ聖歌によせて）》
1975 年　26.4×48.8cm
エングレーヴィング／紙

5



《砂のサバンナ》
1976 年　15.0×17.7cm
エングレーヴィング／紙

6

《百夏夜嵐天の雨簾》
1977 年　6.8×36.0cm
エングレーヴィング／紙

7

《墓守人サルバドールの夢
（アンブロシオ聖歌によせて）》
1977 年　22.5×51.8cm
エングレーヴィング／紙

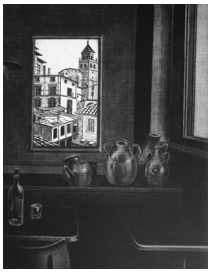
8　○

『La Habitación de mi corazón』
《セゴビアの秋》
1980 年　11.6×16.1cm
メゾチント／紙

9

『La Habitación de mi corazón』
《Carmen 4-S.Madrid》
1980 年　16.2×11.7cm
エングレーヴィング／紙

10



『La Habitación de mi corazón』
《午後の一隅》
1980 年　19.5×14.6cm
メゾチント・エングレーヴィング／紙

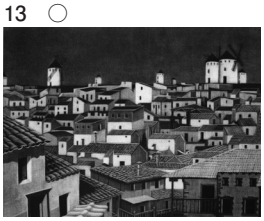
11

『La Habitación de mi corazón』
《遥かなるアンダルシア》
1980 年　19.5×22.7cm
メゾチント／紙

12

『La Habitación de mi corazón』
《クマナ残照》
1980 年　14.7×17.8cm
メゾチント／紙

13　○

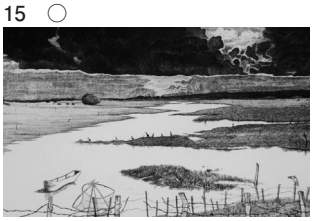


『La Habitación de mi corazón』
《カンポ・デ・クリプタナの家並み》
1980 年　14.6×19.5cm
メゾチント／紙

14　○

『Meditación Secada』
《乾いた街》
1981 年　13.5×23.7cm
メゾチント／紙

15　○

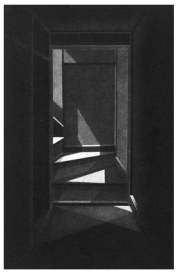


『Meditación Secada』
《白い沼》
1981 年　12.0×19.3cm
エングレーヴィング／紙

16　○

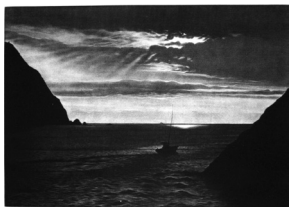
『Meditación Secada』
《春雷》
1981 年　17.3×17.8cm
メゾチント／紙

17　○



《小さな永遠》
1981 年　30.4×20.0cm
メゾチント／紙

18　○



《坊ノ津の海》
1982 年　14.5×20.6cm
メゾチント／紙

19　○

《早春》
1982 年　8.5×21.0cm
エッチング／紙

20 ○

《小野川の春》
1982 年　16.0×29.4cm
エッチング／紙

21 ○

《アリアドネ》
1982 年　14.5×11.5cm
メゾチント・エッチング／紙

22 ○

《陽溜りの小径》
1982 年　24.0×35.8cm
エッチング／紙

23 ○

《コップに挿したシクラメン》
1983 年　22.5×17.6cm
エングレーヴィング／紙

24 ○

《樹（欅）》
1983 年　29.5×18.5cm
エッチング／紙

25 ○

《新開地 F 埠頭（夕立前）》
1984 年　22.5×36.0cm
メゾチント／紙

26 ○

《小さな牛舎》
1984 年　19.5×36.0cm
エッチング／紙

27 ○

《コップに挿した春の野草》
1984 年　13.8×9.8cm
エッチング／紙

28 ○

《マーガレット》
1984 年　22.7×16.5cm
エングレーヴィング／紙

29 ○

《ワイングラスに挿した春の野草》
1984 年　22.3×16.8cm
メゾチント／紙

30 ○

《森の出口》
1984 年　22.5×36.0cm
エッチング／紙

31 ○

《森の入口》
1985 年　29.0×44.8cm
エッチング／紙

32 ○

《夜明けの越後海岸》
1985 年　19.7×35.7cm
メゾチント／紙

33 ○

《小さな波止場》
1985 年　29.5×36.0cm
エングレーヴィング／紙

34 ○

《小さな測候所（真夜中）》
1985 年　21.0×29.5cm
エングレーヴィング／紙

35 ○

《北の森（夏の森と藪）》
1985 年　29.5×24.5cm
エッチング／紙

36 ○

《玩具のある静物（佳世に）》
1985 年　25.6×22.5cm
メゾチント／紙

37 ○

《北風の停車場》
1985 年　19.7×35.7cm
カラーメゾチント・エッチング／紙

38 ○

《城塞の街（暁）》
1986 年　14.0×25.5cm
カラーメゾチント／紙

39 ○

《レェチェリア海岸の夜明け》
1986 年　11.2×29.5cm
カラーメゾチント／紙

40 ○

《プエルト・ラ・クルスの夕焼け》
1986 年　11.4×29.6cm
カラーメゾチント／紙

41 ○

《麦秋の丘》
1987 年　23.5×36.0cm
カラーメゾチント／紙

42 ○

『森』
《秋晝・山麓にて》
1988 年　35.5×29.5cm
エッチング／紙

43 ○

『森』
《北の森（薫風）》
1988 年　35.6×59.2cm
エッチング／紙

44 ○

『森』
《風化する森》
1988 年　29.5×59.8cm
エッチング／紙

45 ○

『森』
《聖森》
1988 年　35.8×59.4cm
エッチング／紙

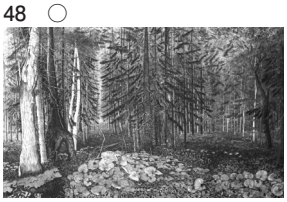
46 ○

『森』
《死の森（木下闇）》
1988 年　37.4×51.0cm
エッチング／紙

47 ○

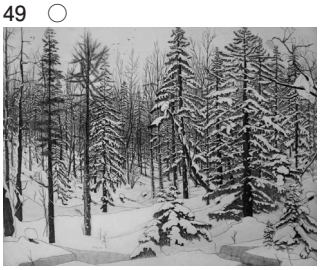
『森』
《晴天好日》
1988 年　29.5×59.7cm
エッチング／紙

48 ○



『森』
《仲秋良夜》
1988 年　26.5×60.0cm
エッチング／紙

49 ○

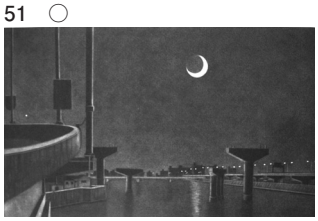


『森』
《冬深き日》
1988 年　45.8×60.0cm
エッチング／紙

50 ○

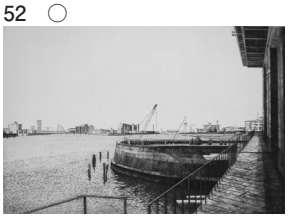
『隅田川河岸』
《蔵前と両国》
1991 年　23.8×18.0cm
エングレーヴィング／紙

51 ○



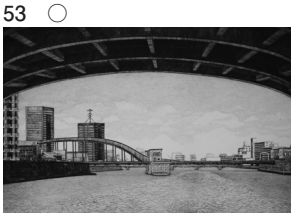
『隅田川河岸』
《月と星と
（1991年、1月17日P.M.8:40）》
1991年　18.0×29.6cm
カラーメゾチント／紙

52 ○



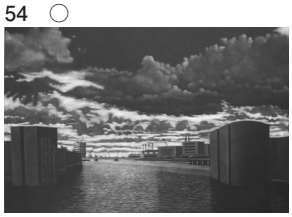
『隅田川河岸』
《水門のある風景》
1991 年　22.3×33.5cm
エングレーヴィング／紙

53 ○



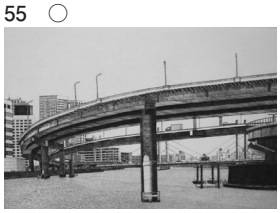
『隅田川河岸』
《勝関橋近辺》
1991 年　23.8×36.3cm
エングレーヴィング／紙

54 ○



『隅田川河岸』
《浜離宮夕照》
1991 年　24.0×36.3cm
メゾチント／紙

55 ○

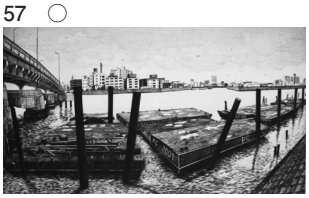


『隅田川河岸』
《浜町新大橋と高速６号向島線》
1991 年　23.8×36.0cm
エングレーヴィング／紙

56 ○

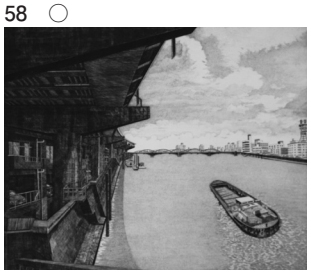
『隅田川河岸』
《永代橋・越中島付近》
1991 年　23.8×36.0cm
エングレーヴィング／紙

57 ○



『隅田川河岸』
《隅田川立夏（佃島・月島付近）》
1991 年　23.0×41.0cm
エングレーヴィング／紙

58 ○



『隅田川河岸』
《向島・言問橋　春うらら》
1991 年　29.8×36.3cm
エングレーヴィング／紙

59 ○

『隅田川河岸』
《廃屋と運河》
1991 年　36.3×29.9cm
エングレーヴィング／紙